

編集後記

今回の紀要は三重大学留学生センターの第3号の紀要である。掲載された研究論文は、中国語を母語とする日本語学習者の誤用例の研究論文と日本語教師とアジア系留学生が捉える授業イメージについての研究論文である。また、研究報告は小学校における国際理解教育と留学生交流についての報告から、留学生と日本人のための異文化間交流の教育的介入の意義についての報告、初級コースにおける視覚リソース相互活用の可能性についての報告、中級学習者の聴解における困難点についての報告、初級日本語学習者の「聞き返し」のストラテジーと日本語母語話者の反応についての報告と多岐にわたっている。書評(拙稿)も第2号と同様に掲載された。

ものごとを明らかにするにはおおまかに言って「存在」自体を探求していく(そして「存在」観を築きあげる)道と「関係性」の面から探求していく道がある。「存在」自体を探求していく道はものごとを不連続においてみようとし、ややもすると部外者からは難渋で理解しにくいことが多い。それに対して「関係性」の面から探求していく道には、根底に、ものごとを連続性においてとらえようとする考えがある。どちらか一方だけではものごとは明らかにならない。存在/関係性と粗い意味で同様な分け方として、内向的/外向的、閉鎖的/開放的、思索的/実践的などが挙げられるが、それに対しては二元論的枠組を越えていないという批判が当然、起こるであろう。それはそれとして、なぜこうしたことと私が言うのかということ、これからの時代は「関係性」中心の時代になるだろうと予測するからである。そのとき、従来の「存在」観では新たな「関係性」に対応できず、結局、新たな「関係性」も従来の「存在」観の枠組の中に押し込められ、何ら新しいものを生み出せないということになるおそれがある。今までであった問題は何ら解決されずに先送りされ、矛盾は増大していく。やがて「関係性」は自らの矛盾によってパラドキシカルに「関係性」そのものを絶っていく。そうならないために必要なのは新たな「存在」観の確立である。その「存在」観の確立のために何が必要かということ、客観的な「存在」についての研究と相まって、何を自らの「存在」の根拠とするか、自らの「存在」のよってきた理由を明らかなものにするということである。それは同時代の各個人、個人に委ねられていることであり、研究者や教育者だけの問題ではないと思う。この第3号の紀要が何らかの意味でその自己の「存在」明確化のよすがとなれば幸いである。

とりとめのないことを書いたようであるが、21世紀初頭の率直な気持ちである。最後に、紀要第3号の作製にあたってご協力いただいた関係各位の皆様方に心より御礼申し上げます。

(藤田昌志)

三重大学留学生センター紀要 第3号

2001年3月20日 印刷

2001年3月25日 発行

編集委員：藤田昌志(委員長)

加賀美常美代

早矢仕彩子

発行者 三重大学留学生センター

〒514-8507 三重県津市上浜町1515

印刷所 伊藤印刷株式会社

〒514-0027 三重県津市大門32-13

TEL 059 (226) 2545 FAX 059 (223) 2862